

# 33 アートの会 8 月度 鑑賞会 報告

日時；8 月 20 日 水曜日 10:00 から 13:15

場所；大阪市立美術館

参加者；小林猛、天王寺谷、塩路夫妻、山川恵子、安居院（記） 計 6 名

## ゴッホ展



## ファン・ゴッホ家のコレクションに焦点を当てた日本初の展覧会

### 感想；

あまりに大勢の人にびっくりした。そしてみんな丁寧に見て行くものだから行列になってなかなか進まない。

ところどころに、その章ごとの解説の動画があって、全体をつかむのに便利であった。NHKが作ったものらしい。画面も綺麗で見ていて気持ちがいい。

ゴッホを有名にしたのは、テオであり、妻のヨーであり、甥のフィンセント・ウィレムであったことがよく分かった。生前は一枚しか売れなかったゴッホの絵に、本当の価値を見出し、上手にプロデュースし、ロンドンのナショナル・ギャラリーに「ひまわり」を売却したのがヨーである。それまで、たくさんの作品を管理保管していたことが凄い。そしてもっとびっくりしたのが、ゴッホの手紙を保存し整理し出版したこと。よほどゴッホに心酔していないとそこまではできない。ゴッホは生前は弟のテオに、死後はその妻のヨーによって作品が伝わっていたのだ。作品を置く場所を準備するだけでなく、作品を管理したのだ。

そして、甥のフィンセント・ウィレムが財団を作りゴッホ美術館を開館する。

展示品に、ヨーの会計簿なるものがあった。鉛筆で書いているのか、たいへん小さい字で書かれていた。ここにどの作品をどこに売ったか、いくらであったかをつけていたのだ。

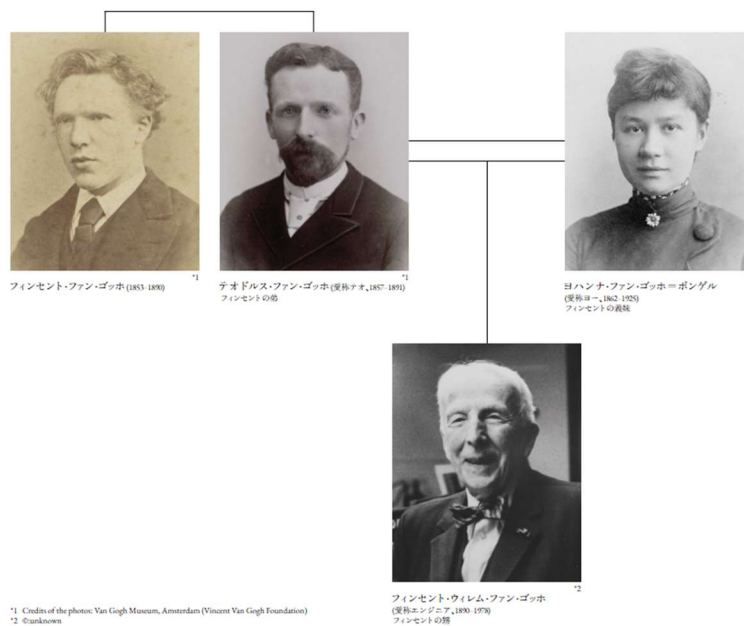
几帳面な人であった。字を見ただけでもきちんとした性格であるのがよくわかる。

そして、びっくりしたのがゴッホ自身の手紙である。これまたとっても小さな字で書いてあった。老眼になる前に書いているのだからできたのであろうが、とても ち密に書かれている。

絵入りの手紙も素晴らしかった。良く丹念に描きこんだものだと感心する。  
さらっと、書けたのであろう。素晴らしい才能だ。

## 第1章 ファン・ゴッホ家のコレクションから ファン・ゴッホ美術館へ

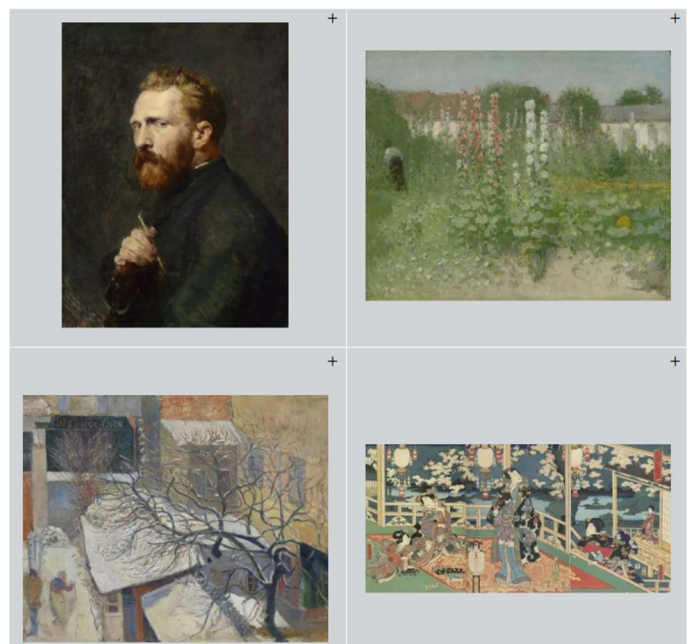
本展でご紹介するファン・ゴッホ家のコレクションの歴史は、フィンセント・ファン・ゴッホの死後、その作品の大半を弟テオが受け継いだところから始まります。本章では、コレクションを継承し、フィンセントの作品を世界へ広めることに貢献した3人の家族をご紹介します。



## 第2章 フィンセントとテオ、ファン・ゴッホ兄弟のコレクション

兄弟のコレクションは、ふたりが生きた時代の雰囲気伝えてくれるとともに、フィンセントの芸術を理解する大きな手がかりとなります。フィンセントとテオはともに十代半ばから画廊で働き始めていて、**手頃な価格のグラフィック・アート**は若いころから身近なものでした。彼らは版画（オリジナル、複製含む）を買い、ときに贈り合います。**画家になる決意をしたフィンセントは、特にフランスやイギリスの雑誌に掲載された挿絵から大きな影響を受けました。**

パリでは同時代の美術も収集します。フィンセントが自らの作品と交換で手に入れた作品





は、このとき彼が画家仲間から得ていた評価を示すものでもあります。**浮世絵を熱心に購入したのは主にフィンセント**で、芸術的な刺激を受けるだけでなく、すでに値が上がっていた印象派の主要画家の作品を、これらと交換で何とか手に入れようと意図したものでもありました。

#### 感想；

浮世絵が素晴らしかった。溪斎英泉「夜の楼」、歌川広重「名所江戸百景 廊中東雲」、歌川国貞「花源氏夜の倂」大判錦絵三枚続き 横長の絵、色彩のすばらしさに感動した。

歌川国貞「東海道名所風景 日本橋」もよかった。構図が素晴らしい。奥行きも感じる。



### 第3章 フィンセント・ファン・ゴッホの絵画と素描

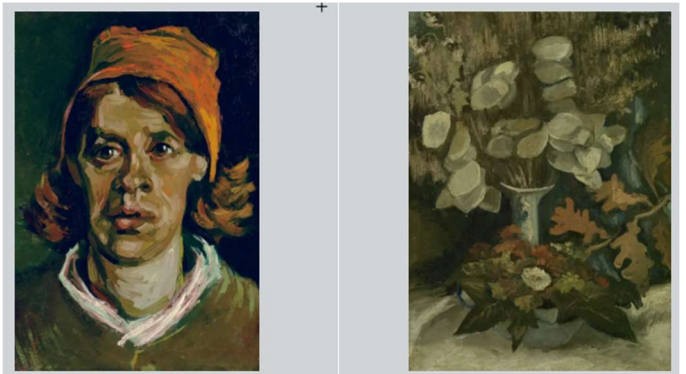
フィンセント・ファン・ゴッホが画家になる決意をしたのは比較的遅く、1880年、27歳のときでした。最初の3年間は主にハーグで素描の腕を磨き、その後ニューネンで油彩画に取り組みます。1886年にパリに出ると、自らの表現が時代遅れであることに気づき、**新しい筆づかいと色彩表現を取り入れ**、独自の様式を生み出していきました。

1888年2月に南仏に移り、アルルで1年3ヵ月、サン=レミ=ド=プロヴァンスで1年を過ごし、自らの表現様式を確立しました。1890年5月にパリ近郊のオーヴェール=シュル=オワーズへ移ります。新しい芸術の可能性を試み続けていましたが、自らの胸部をピストルで撃ち、7月29日に37歳で息を引き取ります。わずか10年という短い画業で驚くほどの数の作品を制作しました。

ファン・ゴッホ家が受け継いできた200点を超える絵画、500点以上の素描・版画は、現在ファン・ゴッホ美術館に保管され、**世界最大のファン・ゴッホ・コレクション**となっています。

#### 感想；

彫像の模写をしていたことにびっくり。「ヴィーナスのトルソー」や「膝をつく人体模型」こんな作品があったのだ。勿論習作であろうが、これに関連して美術館は、石膏彫像「膝をつく小さな人体模型」を購入したのだろうか、はたまたゴッホ自身がずっと持っていたのか、どっちなのだろう。



「クリシー大通り」いまでもこの通りの風景である。「モンマルトル：風車と菜園」ゴッホの時代は、まだ菜園が残っていたのだと時代の違いを実感した。

「農家」オーヴェール＝シュル＝オアーズでの作品だが、この屋根の曲がり具合は変であるが、教会の絵でも同じように曲がっている。真っすぐが描けなくなっていたのか。



《雨の街、サント＝マーティーヌ＝ド＝ラ＝ヴィーユにて》1865年6月 油彩、カンヴァス



《雨の街、サント＝マーティーヌ＝ド＝ラ＝ヴィーユにて》1865年6月 油彩、カンヴァス



《雨の街、サント＝マーティーヌ＝ド＝ラ＝ヴィーユにて》1865年6月 油彩、カンヴァス



《雨の街、サント＝マーティーヌ＝ド＝ラ＝ヴィーユにて》1865年6月 油彩、カンヴァス

## 第4章 ヨー・ファン・ゴッホ＝ボンゲルが 売却した絵画

ヨーはテオと結婚する前には特に美術に縁があったわけではありませんでした。パリでテオと暮らしながら、しだいにファン・ゴッホをはじめとする近現代美術に関する知識を身につけました。テオから膨大な作品を受け継いだのちには、個人収集家や美術館の世界、美術取引の仕組みについても精通してゆきます。ヨーが定期的に作品を売却したのは、親子が生計を立てるためでもありましたが、フィンセント・ファン・ゴッホの**評価を確立するという大きな目的のため**でもありました。こうしたヨーの尽力を明らかにするのが、テオとヨーの会計簿です。テオの死後には作品の売却についても記されるようになり、ヨーがどの作品をいつ誰にいくらで売却したのか、生々しい記録が残されました。会計簿の調査・研究は進み、記載されたもののうち、170点以上の絵画と44点の紙作品が特定されています。

### 感想：

「モンマルトルの菜園」これはゴッホにしては大きなサイズの絵である。力が入っていたの



This is a reproduction of the painting 'Olive Trees with Yellow Sky and Sea' by the Dutch Post-Impressionist painter Vincent van Gogh. The painting shows a coastal scene from a high vantage point. In the foreground, a wide, light-colored path or road leads from the bottom center towards the middle ground. To the left of the path, there are several small, simple buildings, some with red roofs, nestled among olive trees. The middle ground is filled with dense olive groves, their silvery-green foliage contrasting with the golden-brown ground. In the background, a small town with more buildings is visible on a slight rise, and a prominent windmill stands out against the sky. The sky is a deep, vibrant blue with thick, expressive brushstrokes, suggesting a dramatic, overcast day. The overall style is characteristic of Van Gogh's work, with visible, energetic brushwork and a rich, textured surface.

[illegible]

1973年、ファン・ゴッホ美術館は主にフィンセント・ファン・ゴッホ財団のコレクションを展示する美術館として開館しました。ファン・ゴッホ作品と家族に受け継がれてきたほかの画家たちの作品を中心にしながら、今日まで運営されてきました。

The image is a composite. On the left is a black and white sketch of a man from behind, wearing a long, dark coat, a hat, and boots, holding a closed umbrella. To the right of the sketch is a color photograph of a harbor scene. In the foreground, a small wooden boat is moored. In the background, there are buildings and a bridge. The text 'No 199' is written in the bottom left corner of the image.



最後の大型画面での展示が面白かった。アーモンドの花の実写映像が印象深かった。

白だけではなく、紫色が見えた。

これをゴッホが描いたのだと、実感できた。

芽吹くことのうれしさ、そして花が咲くことの喜び。ゴッホは甥の誕生にこの絵を描いたのだ。その通り、甥のヴィンセント・ウィレムは、ゴッホ自身の作品で、ゴッホ美術館に作品を並べ、世界中の人々の称賛を浴びている。ゴッホの甥への思いが、自らの作品群への芽吹きと満開の花へ変化するさまを、今、見せてくれているのだ。

素晴らしい家族に、乾杯！

良い展覧会であった。

11:30 出口に集合し、みんなで歩いて

11:50 昼食 **Bellino** いつものイタリアンランチ

Pranzo A（平日ランチ限定） 1,400 円

「グリーンサラダ」 「本日のパスタ」又は「ピッツァ」 「自家製フォカッチャ」  
ランチ付きの飲み物 or デザートはサービス価格。パスタとピッツァをシェアした。

みんなで2種のジェラートを食べました。

鑑賞会も食事も満足しました。

ほら、



以上